

朝鮮人強制連行とは何か ——過去・現在・未来を見据えて——

小野寺 真人

プロブレマティック
問題の所在

本稿は、朝鮮人強制連行論についてのアルファにしてオメガである。
エリック・ホブズボームによれば、帝国主義の全盛期は第一次世界大戦をピークポイントとし、それ以降衰退の一途をたどった、とされる。第一次世界大戦という未曾有の殲滅戦が、植民地を含めた総力戦体制の構築を必然的に惹起し、そのことから植民地支配されていた国家・地域が民族自決権を求めたからである。

しかし、直接的に戦火に巻き込まれなかった後発帝国主義国家である帝国日本は、例外的存在であるといつてよい。もちろん、植民地朝鮮における三・一独立運動の意義を過小評価するわけではないが、一方では、それが植民地朝鮮の独立を導出しえなかったのも確

かだからである。

帝国日本が本格的に総力戦体制の構築に取りかかったのは、人類史上最大最悪の殲滅戦となった第二次世界大戦期になつてからである。しかし、その段階にいたつても、植民地朝鮮における兵役導入に関しては敗戦直前によくやく、極めて限定的に導入されたことはよく知られている。とはいえ、それ以前から始まっていたのが労働力の輸入、すなわち朝鮮人強制連行である。

近年では、朝鮮人強制連行という表現ではなく《強制動員》という言葉もしくはば目にするようになった。しかし、《強制動員》とは、奇妙な術語である。ミシェル・フーコーの言葉を借りるまでもなく、動員される《主体》とは、英語でいうところの subject にほかならないのであるが、英和辞典を引いてみればそこには《臣下》という意味をみつけることはたやすい。すなわち、《主体》とは、システムの中で相互作用的に自律するものであると同時に、システムに何

[Article]
Masato Onodera
What is the Forced Recruitment of
Korean?: Looking to the Past, the
Present, and the Future
(Received 15 May 2023)

A Noon of Liberal Arts, No. 12, 2024

らかの形で従属するものなのである。もちろん、自主的に動員されていった人びとのことを無視するわけではないが、筆者からすれば、トートロジックなものとしても読めてしまうのである。

そうであるがゆえにこそ、『強制』という言葉の意味をあらためて考えてみなければなるまい。長年使用されてきた歴史(学)的用語である『朝鮮人強制連行』というタームは、近年なかなか目にするのが少ない。『労働動員』『労務動員』『強制動員』や『強制労働』といったタームを目にする機会が圧倒的に増えた。こうした術語の乱立という現象こそ、朝鮮人強制連行論と歴史修正主義との闘いの混乱を物語っているといえよう。

近年にあつて、唯一目にとまるのは、外村大による研究くらいのものであろう。とはいえ、外村の研究は主として『朝鮮人強制連行』の制度的実態の解明に力点を置いたものであり、労働現場における実態や証言を等閑視している、ともいえる。すなわち、外村の研究は制度の「実在」を実証したものである。

それに対して本稿では、あくまで聴き取り証言にあえて焦点をあてる。そのことよつて労働者の『実存的な生のあり方』から根本的に問題を考えたいからである。

『動員』なのか『連行』なのか……両者の間には極めて細く、それでいて深い稜線が引かれているが、本稿ではその稜線に深く潜行することを志向する。そしてそのことが、結局は『連行』という用語が相応しいものであることを証明するだろう。それも、極めて限定的な地域、すなわち、北海道雨竜郡幌加内町朱鞠内の事例から総

論としての朝鮮人強制連行について論じる。

極めて限定的な地域に絞つて論じたとしても、本稿では二〇〇六年に、被害者／サバイバーたちへの入念な聴き取り調査を行ったため、バラエティーに富んだ事例を紹介できるし、また、そうであるがゆえにこそ、総論を志向することが可能になるであろう。

また、朝鮮人強制連行の歴史的事実をめぐる歴史修正主義とのバトルグラウンドに決着を着けると同時に、本稿では、現在そして未来の日本社会における外国人技能実習生と移民／難民問題についてのあり方についてもひと言だけ論じたいと考えている。

なお、本論に突入する前にここで断つておかねばならないことがある。本稿に登場する証言者たちは総て仮名である。なぜならば、聴き取り調査からあまりにも時間が経過したため、証言者たちが総て鬼籍に入つてしまい、実名での掲載許諾をえることができなかったからである。この点に関しては、筆者の遅筆を恥じ入る次第である。

さて、それではいよいよ証言の世界に分け入つていこう。証言は、断片的に記憶が甦つていくケースが多く、ともすればノイズに読めてしまうので、本稿では構成してお伝えすることとする。

第一章 李詳石の場合

聴き取り年月日…二〇〇六年六月一〇日

本籍地…慶尚南道昌寧群

現住所…釜山市

出生…一九二一年

連行期…一九四〇年頃

農業をしていた。土地は少ししかなく、日本人の地主の土地で作っていた。稲作だった。日本人がほとんどお米を持っていてしまったのでお腹が空いていた。管理者がいた。作物を運ぶ仕事、作男もしていた。

六人兄弟の四番目、姉二人と両親。いちばん上のお兄さんが日本に行つて怪我をした。富山に行つてダイナマイトで失明した。

学校には学費がなくて行けなかった。余裕のある家は国民学校に行つた。雨が降らなくて作物ができない。井戸を掘つて水を探していたが、ご飯を食べようとしたら警察が来た。ちよつと来いというので手錠を掛けられた。およそ一〇〇人が警察署の広場にいた。一八歳の時だった。警察は日本人、部下は朝鮮人。北海道の水力発電所を建設するといわれた。日本人が三人いて、服を着替えさせられた。警察から逃げることができず、連行さ

れた。大邱、釜山、下関、大阪と移動し、東京で皇居の見物をした。三人の日本人が見張つていて、釜山で逃げた人たちもいたが、同じ服を着させられていたので、すぐに捕まった。青森から函館、それから深川から汽車で八時間乗つて朱鞠内に着いた。着いてから二日間は何もしないでいいといわれた。その後、五列に並ばされて五工区まであるうちの二つの工区に行かされた。わかつていれば、同じ村のものは同じ列に並んだが、結局はバラバラにされた。

私の来る前から少し韓国人はいた。北朝鮮の人も来た。現場ではよく殴られたが、返事をうまくして殴られないように工夫した。四時に起きて五時に現場に出た。お腹が空いて死にそうだった。七穀米、茶碗が小さかった。逃げる人はお腹が空いて我慢できなくて逃げた。汽車に乗ると手帳、募集手帳ともうひとつ手帳があった。それを調べて捕まる。

一工区で二年半、二工区で二年働いた。冬は鉱山で働かされた。鉱石を運ぶ仕事だった。雪が降つて凄かったので、雪かきをした冬もあった。一日二円五〇銭、ご飯代が一円、靴代が一円で、小遣いを使うとすぐにお金はなくなつた。

現場監督が新井という北朝鮮出身の男で、地下足袋を買つてくれといつたら殴られて右耳が聞こえなくなつた。五人の監督のうち、新井が一番怖かつた。監督は、三人が日本人、二人が朝鮮人だった。新井は日本人に気に入られるように、人を酷使した。地下足袋があつたのに藁靴しか使わせなかつた。人が死

んでも、犬が死ぬより悪かった。

韓国人同士で話すことも禁じられていた。相談して逃げられ
たら困るからだと思う。トロッコ事故で二人が死んだ。火葬し
た。雪が降ってくるので、焼いたが焼けなかった。お寺に預けた。
遺族にも連絡もしていないだろう。

(写真をみて) ここは二工区だ。ここで働いていた。ここは分
かるような気がする。コンクリートを混ぜて上に上げる仕事も
した。一番上で、上げると合図する仕事もした。直接見ていな
いが、人が上から落ちたということは聞いた。死んでも労働者
には教えない。どうなったか分からない。

中村組で働いた。一工区と二工区に中村組があった。何人が
が逃げたが五〇歳のおじいさんだった。日本語ができる人だっ
た。一年間くらい働いていて逃げた。道もないし、汽車に乗ら
なければ逃げられないが、警察が捕まえた。そういう人たちは、
皆が見ている前で散々殴られた。死にそうになったら水をかけ
て、また殴る。食事も与えられない。次の日におかゆを出され
てもとても食べられない。それを見て、とても逃げられないと
思った。

今まで食べたことがなかったおかずは路を食べた。捕まった
その人がまた逃げて捕まった。部屋に帰るとその人はいなかっ
たので、死んだかどうか分からない。休日は正月とお盆の二日
だけだった。休みの日も部屋には鍵が掛かっていて自由に外に
出られない。部屋でお酒が出て、それをお小遣いで買って飲ん

で過ごした。

衣料切符が配られた。一年に三〇点だった。上着一五点、ズ
ボン一〇点、靴下五点、それでなくなる。お小遣いがあっても
服すら買えない。日本人のおむつを取って、繕った。

この証言から理解できるのは、労働者を募集するという建物で、警
察権力が深く関与し、官民一体の強制連行が行われたということだ
ある。新井という、現在の朝鮮民主主義人民共和国出身の現場監督
の身振りも注目し値しよう。日本人・中間管理職朝鮮人・労働者と
いうヒエラルキーを想起させるからである。そして、その現場は、
凄惨極まる地獄のような労働環境であったと断言してよからう。

第二章 壬貴達の場合

聴き取り年月日…二〇〇六年六月九日

本籍地…慶尚南道蔚山斗西郡

現住所…蔚山市

出生…一九二五年

連行時期…一九四一年五月ごろ

二工区での運搬をしていた。セメントで漏水を防ぐ仕事をし

ていた。

岡田組で働いた。そこには日本人と朝鮮人がいた。住民はなくて労働者だけだった。鳶がいたが、一ヶ月に一〇日くらいしか働かなかつた。私たちは少ない賃金、一ヶ月に二、三円の給料で、ご飯を食べたらなくなつた。飯場には一人ずつ見張りがいて逃げられないようになっていた。

一九四一年に飯場に入ったが、その日に朝鮮人が二人逃げた。飯場の監督は朝鮮人で子どもが二人いた。逃げるためには金と服を用意しなければならぬが、その二人は用意していたようだった。

家は農業をしていた。上に二人下に二人、私は真ん中です。五人兄弟。上に姉二人。下に一人妹。両親なども含めて一〇人家族。六〇〇坪の土地を持ち、ほかに土地を借りていた。下の弟は目が見えなかつた。

数え年一七歳で役場からの募集に応じた。一九四二年五月に行き、一九四四年八月に帰つてきた。冬は鉱山に行かされて働いた。どこかはわからない。次の年の冬は炭鉱だった。三年目は雪が多くて雪かきをした。

ご飯は麦ご飯だったが、朱鞠内では芋の皮を食べさせられた。帰る前には炊事の仕事もした。佐藤かずこ、きくちゃんとおやじさんがいた。

日本に行く時には朝鮮人が付き添つた。麗水から行つた。汽車に乗つて青森へ。帰りは函館から船に乗つた。

部屋の親方は日本人、見張りも日本人だった。トイレも部屋の中になって、外出の自由はなかつた。朝五時から夜五時まで働かされた。四時に起こされた。ご飯は立つたまま食べて、現場まで一列に並んで歩かされた。芋の皮のご飯が昼食だった。汽車の路線があつた。ノルマがあつて、終わると買えることができた。トウモロコシ畑がまわりにあつて、それも食べた。お腹が空いていたから。

鉱山では外で物を運ぶ作業をしていた。トロツコを押す仕事でそんなにきつくはなかつた。ピンに引つけて左手の指が一本なくなつた。賃金は一ヶ月に一度受け取つた。二円から三円だった。初めて四〇円を送金した。少ないと思つたが、仕方がなかつた。

日本政府には補償をしてほしい。お金を稼ぎたいと思い、日本に行つたが、後悔している。

「お金を稼」ぐために「日本に行つたが、後悔している」。このひと言に総ては尽きよう。

第三章 徐方佑の場合

聴き取り年月日：二〇〇六年六月九日

本籍地…不明

現住所…蔚山市

出生…一九一五年

連行時期…一九四一年

六歳の時に父が死んだ。弟も死んだ。役場での募集に応じた。蔚山に集結して麗水から連行された。一九四一年頃連行されて一九四四年一〇月に帰った。三人が募集に応じた。一人は帰ってきたが、孫介用さんは行方不明だ。弟が障害者でその世話で両親は身体を壊した。そのため、日本に出稼ぎに出ようと思った。現場では強制があった。日本人と朝鮮人の監督がいた。砂利

を積むなどの仕事をさせられた。日本に行つたことを後悔した。一工区、二工区、三工区があった。三工区で働かされたが、そこが酷かった。他の工区から尋ねてきた朝鮮人が来たことにより警察が入ってきた。喧嘩になつて刑務所に送られた人もいた。連行されるときはご飯をたくさん食べさせてやるといわれたがそうではなかった。働いている人はたくさんいました。

陸軍浅茅野飛行場にも働きに行つた。飛行場ではご飯をよそおう仕事で楽だったが、他の人は滑走路のならしなどをしていた。タコ部屋が何カ所があった。飛行場から他の人は移されたが、私は冬でもここにいた。林という責任者がいた。掩体壕があった。日本人にはいい人もいたが悪い人の方が圧倒的に多かった。お金は貯金しておいてやるといわれたが、一切もらえなかった。

帰りに一握りだけ渡された。

朱鞠内での労働は、毎日が殴られるのが仕事だったようなものだ。日本人は毎日戦争で戦っているのだから、朝鮮人は一人二人死んでも構わないと言われた。

賃金は「一切もらえなかった」。募集に応じて労働するために渡日したにもかかわらず、ここでも行き先は地獄だったというわけだ。

結語——《経済的重力圏》としての帝国日本と強制連行

近年の研究では、日本人による地主経営により零細農家を経営せざるをえなかった朝鮮人が多くいたこともよく知られた事実である。

本稿の分析の通りならば、朝鮮人強制連行問題の発生原因が帝國的経済的重力圏となるのは火を見るよりも明らかだ。そうだとすれば、問題となるのは朝鮮人強制連行だけにはとどまらない。現在の、安価な労働力として酷使されている外国人技能実習生や、剥き出しの暴力を振るう入国管理体制にまで事は及ぶといつてよからう。とくに入管に関してはラスナヤケ・リヤナゲ・ウィシユマ・サンダマリさんを死亡(！)にまで追いやり、筆者としては憤りを禁じえない。そうであるがゆえにこそ、古き帝国日本と新しいグローバリズムの渦中でいまだ帝国たろうとする日本の、古くて新しい、あのそびえ

立つ糞のような経済的重力圏の支柱との闘争を続けよ。帝国は復活し続ける。持続可能なものとして、何度でもだ。ならば、新しい闘争に備えよ。何度でもだ。現在までに日本に居住する外国籍住民(あるいは、日本国籍を取得した外国にルーツをもつ人びと)と、来るべき移民/難民らと、愛によって結ばれるために。

冒頭の文言を繰り返しておこう。これがアルファにしてオメガである。

本稿が、鬼籍に入ってしまった総てのハラボジ(日本語で「おじいさん」の意)に何らかの供養と救いとなればこの上なく幸甚の至りである。

【主要参考文献】(著者あいいうえお順)

小熊英二・姜尚中編『在日一世の記録』集英社、二〇〇八年

小野寺正巳『雨竜水力発電所の建設とその背景に関する一考察——王子製紙の北海道進出との関連を中心に——』『北海学園大学経済

論集』第三九巻第二号、一九九二年

小野寺正巳『新聞報道にみる戦時下の名雨線鉄道・雨竜水力発電所建

設工事と労働』『拓殖大学人文科学研究所 紀要 拓殖大学論集

(二四二) 人文・自然・人間科学研究』第五号、二〇〇一年

エリック・J・ホブズボーム、野口建彦・野口照子訳『帝国の時代1

1875-1914』みすず書房、二〇一三年

エリック・J・ホブズボーム、野口建彦・長尾史郎・野口照子訳『帝

国の時代2 1873-1914』みすず書房、二〇一三年

小林啓治『総力戦体制の正体』柏書房、二〇一六年

空知民衆史講座『朱鞞内・韓国・民衆 和解のかけ橋 統笹の墓標』

空知民衆史講座、一九九四年

鄭大均『在日・強制連行の神話』文藝春秋社、二〇〇四年

外村大『朝鮮人強制連行』岩波書店、二〇一二年

西成田豊『在日朝鮮人の「世界」と「帝国」日本』東京大学出版会、

一九九七年

林慶植『朝鮮人強制連行の記録』未来社、一九六五年

林沙羅『外国人をつくりだす 戦後日本における「密航」と入国管理

制度の適用』ナカニシヤ出版、二〇一七年

林沙羅『記憶を語る、歴史を書く オーラルヒストリーと社会調査』

有斐閣、二〇一三年

樋口健二『忘れられた皇軍兵士たち…一五年戦争下の総動員体制の研

究』こぶし書房、二〇一七年

樋口雄一『戦時下朝鮮の農民生活誌 1939～1945』社会評論社、

一九九八年

山田昭次・古庄正・樋口雄一『朝鮮人戦時労働動員』岩波書店、

二〇〇五年

おのてら・まさと(日本近現代史・思想史)

